ハーレムマンション
僕と美人妻たちの秘蜜な昼下がり

北條拓人
挿絵／ロッコ

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

序章 …… 4
第一章 菜緒／若妻との青い体験 …… 18
第二章 綾香／隣人妻は、あこがれの先輩 …… 71
第三章 まなみ／元アイドル女優は未亡人 …… 119
第四章 綾香再び／悦びの部屋 …… 179
第五章 牝妻たちとの終わらない性宴 …… 236

登場人物 *Characters*

木原 洋介 705号室
(きはら ようすけ)

叔父夫婦が住んでいたマンションに転がり込んだ貧乏学生。単純でお人好し。

神谷 綾香 703号室
(かみや あやか)

洋介の高校時代の先輩。当時はマドンナ的存在で現在もその美貌は健在。三年前に結婚するが、夫婦関係はうまくいっていない。

木原 まなみ 805号室
(きはら まなみ)

女優に歌手、グラビアなどこなしていた元アイドル。現在は年齢を経て艶っぽさが増す未亡人。

足立 菜緒 706号室
(あだち なお)

三十歳年上の夫と十六の時に結婚した幼妻。夫を愛しているが、年若い洋介にも興味を持つ。

超がつくほどのミニスカートにニーソックス姿の彼女も、甘い悪戯を期待しての出で立ちなのだ。

「ああん、もう、邪魔ばかりぃ……包丁持ってるのに危ないじゃない。怪我しても知らないからぁ」

小気味よく包丁の音を立てる菜緒の太ももに頬ずりしながら、水をはじくほどの美肌に手指を這わせる。

まるで秋葉原のメイドさんが着るようなフリルで飾られたエプロンに、顔のあちこちをくすぐられるのが、また愉しい。ひらひらフリルの純白エプロンを着けた菜緒は、初々しい新妻そのもので、いかんなく洋介の助平心をそそってくれる。

小柄な割に腰高な美脚は、大理石のようなつるすべでありながら、指の一本一本がふかっと埋まるほどで、食パンのようにふんわりした触り心地だった。

しかも、その顔をあげると、左右に大きく張り出した美尻が、存在感たっぷりにそこにあるのだ。むっちりとした太ももに連なりWを描く丸みには、白いシルクのパンティがぴっちりと張りついて、見事なまでに盛り上がっている。断固として重力に逆らうフォルムは、天使の見えない掌に支えられているかのようだ。

「ちょ、ちょっと、ああん洋介ぇ……」

抗議するような甘えるような、鼻にかかった艶声。洋介が、のれんをくぐるようにミニスカートの中に顔を潜らせたことを知覚してのものだ。
細腰がよじれ、お尻が左右に振られる。プルンと揺れた尻朶が、生々しいまでの肉感を伝えている。
「気にしないで、料理続けてよ。僕は、お気に入りのお尻を料理するから……」
ゆっくりと洋介は、尻朶に顔を近づけた。やわらかそうな丸みは、ほこほことした熱を孕んでいて、その表面からは、むんとした牝フェロモンを放っている。
洋介は至近距離の肉尻に、思い切って顔を押し付けた。
「もうっ、しょうもない悪戯ばっかりぃ」
その癖、菜緒は細腰をくねらせ、わざとお尻を顔に擦りつけてくる。
「ああ、ふっかふかだぁ……」
お留守になった手指を、再び太ももに這わせ、生肌のぬくもりとビロードのような感触を堪能した。充実したふくらはぎが、きゅっと引き締まり、同時にお尻の谷間もその隙間を肉房で狭めた。
「ねえ包丁使っているんだってばぁ……危ないよぅ」
太ももを触られるたび、びくんと小刻みな震えが起きた。明らかに、洋介の悪戯を

意識している。次に、どこを触られるのか、神経を集中させているのが判る。その分、かえって敏感さを増していることも。
「大丈夫、大丈夫。菜緒は、包丁さばきうまいから。ほら続けて……。そんなんじゃあ夜になっちゃうよ」
夕刻までには部屋に戻らなくてはならない菜緒を、洋介は嫉妬混じりに促した。
「うっ、っくふぅ……。よ、洋介ぇ」
ももの内側の特に柔らかい部分に触れると、ビクンと腰がセクシーにひくついた。
「んっ、んんっ……」
じっとしていないももを外側へと回りこみ、存分に指を滑らせてからマシュマロのような尻朶へと舞い戻る。
美尻の丸い輪郭に沿って、五指を鉤にして這わせてみる。
「あんっ！」
触れられたお尻がキュンと収縮して、エクボを描き、深い谷間が一本の溝となった。
「ああっ すごいっ、すごすぎるよ!! こんなにボリュームたっぷりで……」
臀肉に指を食い込ませたまま、肉の充実を確かめる。グリグリとこね回したかと思うと、丸い輪郭にあわせてシルク地ごと肌を擦る。

心なしか柑橘系の香りに、酸味が増した気がした。
「ああん。洋介のHぃぃ」
今の菜緒のセリフを文字にすると、その後にハートマークがつくだろう。そう確信できるほど、明らかな嬌声だった。
「菜緒っ……」
名前を呼んだ声が、興奮に掠れていく。
瑞々しいまでに弾力のある若尻は、心地よいまでに指に反発して、十分以上に洋介を愉しませてくれた。
「いやあん、洋介の手つきいやらしいっ……。そんなにしないでぇ」
双臀に指を食い込ませ、ぐりぐりとこね回したり、左右に割り広げたりしては元に戻し、今度は力いっぱいに引きつけながら肉を寄せ集める。
下から支えるようにしているので、重みがずしりと両腕にかかっている。その重量感が、内部に詰まった肉の豊かさを証明していた。
「すごい。すごいよっ。いいさわり心地だ……」
お尻に手をあてがったまま身体を捻じ曲げ、ミニスカートを潜り抜けると菜緒の美貌を窺った。美しい眉間に悩ましく刻まれた皺、長い睫毛が卑猥に震えている。しっ

ぽりと潤ませた大きな瞳を、ゆっくりと開け閉めさせ、口角の上がった愛らしい口元は、今にもそこからよがり声が漏れだしそうなほど、ぽっかりと開かれている。薄い割にふるんとした唇が、わなないているのも色っぽい。

「気持ちよさそうだね。菜緒はそんなにお尻、敏感だったっけ？」

「ああん意地悪っ……こんな顔、覗かないでぇ」

焦点を合わせていなかった菜緒の視線が、洋介のそれとぶつかり、羞恥心を刺激されたのか、童女のように小首が振られた。

「意地悪っ……洋介の意地悪ぅっ！」

尻肉の素晴らしすぎる感触に、理性をとうに吹き飛ばされている。すでに充分以上に勃起させた肉塊を、思い切りしごきたくて仕方がなかった。そのやるせなさが、さらに指に力を込めさせる。

「菜緒のお尻、最高だっ！　こうして触るだけで、気持ちいい……。いつまでも触っていたい気持ちにさせられるよ」

夢中で洋介は、中指を頂点にした四本の指をパンティの中に潜りこませた。尻肌は、おそろしくきめ細かで、その表面には、しっとりと汗を滲ませていた。

尻の丸みに沿って、じりじりと指の付け根まで侵入させると、手をグイッとずりあ

げてやる。
「ああんっだめよ、いやあん」
自然、尻朶を覆っていた三角の生地は谷間で狭まり、ずれ込んで、Tバック状に食い込んだ。しかも、絞られた薄布が食い込んだのは、谷間ばかりではない。下から覗く洋介には、W字に女陰の形が浮かびあがるほど食い込んでいるのが丸見えだった。
「きゃあっっ!!」
鮮烈な淫波に襲われ、菜緒は激しく身悶えた。洋介の火照った指先が、縦溝の線をなぞり上げたからだ。途端に、膣奥から蜜液が滲みだしたらしく、白いパンティにシミが浮かんだ。
「うぐぅっっ、んんんっ……ふむぅぅぅっ」
零れ落ちるはしたない喘ぎをこらえようと、艶声はくぐもったものに変わった。しかし、追い討ちをかけるように指先で外陰唇を擦ってやると、途端に唇がほつれて、悩ましい嬌声が上がる。そんな反応の一つひとつがうれしくて、敏感な小突起までも押し上げた。
「うぅぅん! ああん、だ、だめぇ……。そこは、そこはぁぁ……」
「そんなに気持ちいいの? もう料理どころじゃないみたいだね」

くちゅくちゅんと、猥がわしい水音が立ちはじめている。
それもそのはず、純白のパンティは、ぐしょぐしょヌレヌレの状態にあり、恥裂の薄紅が透けて見えそうなほどなのだ。洋介が指先でしきりに擦るのも、その濡れシミを広げるためだった。
「ひうん！」
興奮しきった洋介は、ついには鼻面を濡れそぼったパンティの船底にあて、割れ目部分を突っつきはじめた。どんどん潤みを増していく股間こそが、濃密なおんなの匂いの源泉であることに気がつき、鼻をヒクつかせて、振りまかれた淫香を肺いっぱいに吸い込んだ。
「ああだめ、そんなところの匂い、嗅いだりしないでぇ」
イノシシがぐりぐりと鼻先で穴を掘るように、匂いの源泉をほじくる。
酸性の臭気を帯びた淫香が、どんどん強くなっていく。刺激を受けた肉花びらがほころんだのか、それとも膣口がよじれたのか、蜜壷に溜められていた愛液が、ダムの決壊により、とろーり零れ出たのだ。
「ああん、お腹のあたりドクンってしたぁ……恥ずかしいお汁、零れたのね……」
菜緒が知覚した通り、パンティは鼻先で少し押しただけでも、じゅじゅわわあっと

愛蜜が染み出てくるほどに濡れている。
「だめえ、だめえ、そんなにほじらないでぇ」
こみ上げる甘い電流を我慢しきれなくなった女体は、骨が溶け崩れたかのようにくねくねと頼りなく、下半身をくねらせている。
「気持ちいいの？　イっちゃいそうなんだね？」
洋介はふごふごと鼻を鳴らしながら、シルク地を恥裂に押し込むようにしてその切っ先を擦りつけた。
「ひやあ、ああん、お鼻挿入れないで。恥ずかしすぎるよぉ！」
ヴァギナに食い込みW字を描くパンティ。黒いシミからは、ついに愛蜜がぽたぽたと滴り落ち、あまりにも淫靡な光景を晒している。
「あん、ああっ、んん……ねえ、待って、ねえ、ああ、そんなぁ」
逃れようとしてか、じっとしていられなくなったものか、艶臀が小刻みに躍る。
快美な悪戯に、立っているのもつらいようで、かくかくと膝が笑っている。ついには取りついていたキッチン台に、上体を預けるように突っ伏してしまった。
「ふあ、あああ……すごいの……頭の中がぐるぐるして何も考えられないぃ……ねえ、もう我慢できない……洋介が欲しい」

一番うれしい言葉を得た洋介は、細腰にしがみついているシルク地のゴム部分に手指をくぐらせた。よじれによじれTバック状になった薄布を、ゆっくりと脱がせていく。つるんとした茹で玉子のようなお尻を露出させ、黒のニーソックスの残る美脚から抜き取った。

2.

おもむろに洋介は、その場に立ちあがり、自らのズボンをパンツごと脱ぎ捨てると、菜緒のミニスカートをペロンとまくり上げた。

あらためて、自らが剥きあげた悩ましい脚線美と向き直る。

小柄な割に腰高で、すらりとカモシカのように伸びた脚。瑞々しくもむちっとした太ももの充実ぶり。つるつるすべすべのお尻は、いかにも可憐にフルフルと揺れている。

（ああ、お尻が誘っている……）

ただそこに存在するだけで、洋介は激情を揺さぶられた。それほど菜緒の尻肉は、魅力的なのだ。重力に反するように持ち上がった尻朶が、悩殺の谷間を作り出している。それでいて活動的な若妻にふさわしく、キュッと引き締まり、ぷるんぷるんに張

り詰めている印象だ。
「うわあっ、菜緒のおま○こ、いやらしい眺めだよ。愛液でべとべとになってぬめぇっとピンクに光ってる……」
若妻の割に菜緒の女性器は、あまり使いこまれていないように見える。美しい左右対称に整い、色も初々しい薄紅なのだ。楚々とした六センチほどもない恥裂の縁を、鶏冠のような肉花びらがチロリと覗き、ふるふるとそよいでいる。
「ああん、いやぁっ……そんな言わないでぇ……恥ずかしくなっちゃうぅ」
いやらしい指摘を受け、キッチン台に突っ伏したまま細腰がクナクナと躍った。あまりの恥ずかしさにじっとしていられないのだろうが、挑発されているようにも感じられる。
「ほら、もっと股を開いて、ぱっくりとおま○こを晒してよ」
内ももに両手をあてがい、撫でるような手つきで美脚の逆V字幅を広げていく。
まるで怯えでもするように、菜緒の背筋がビクンと震えた。
「もっと、恥ずかしい格好をさせたいのね。いいわ……」
じりじりと開脚の幅を広げつつ、双臀を後ろに突き出してくる菜緒。よほど汁気の多い体質なのか、見る見るうちに淫裂が潤みを増していく。どれほど美しい女性でも

秘部は、おんなを淫蕩にさせる器官である。どこよりも生々しく、淫らであるからこそ、痛いほど洋介の視線を感じ、透明な露を花びらがじっとりと含むのだ。
「なんてHな眺めなんだろう。触ってもいないのにびらびらがヒクヒク蠢いているよ」
感極まった声で、感想を述べた。
「いやらしい洋介っ！　もう、見てばっかりいないで、早くちょうだい！」
振り返った濡れた瞳が悪戯っぽく輝いた。突き出したお尻が、洋介との距離を縮め、勃起しっぱなしの肉塊にあてがわれた。
ふんわりとしたマシュマロ肌が、むにゅりと屹立を押しつぶす。たったそれだけで、途方もなく心地よい電流が、下腹部を襲った。
「うおっ！　ああ菜緒っ!!」
矢も盾もたまらず、洋介は双の尻朶に掌をあてがい、むぎゅっと指先をくいこませた。
「このまま後ろから……！」
へそに届きそうなほどそそり勃たせている屹立を、ほころんだ花びらにくちゅくちゅんと擦りつける。
「あ、はあん……よ、洋介ぇっ」

しきりに淫靡な水音を立てて、切っ先に菜緒が噴きこぼした愛蜜を塗りたくる。
肉びらや膣孔をぐりぐりと勃起で擦りつけるたび、白い太ももがぶるぶると震えた。
「いま突き刺してあげるから、そんなに動かないでよ」
掌で臀肉をこね回し、鳥の嘴（くちばし）のような鈴口で媚肉をついばみ、肉幹でぞりぞりと縦溝にあて擦りする。ももの震えが女体へと拡がり、戦慄へと変化する様子に、焦らし続ける洋介にも限界が来た。
「いくよ、菜緒っ！」
引き締まった腰で、女尻を押すように、グイっと切っ先を突き挿した。
しかし、勢い余って肉塊は、充血した肉芽をなぎ倒し、薄萌の陰毛を擦りつけた。
「あっ…そこ違っ……」
あて擦りされて悲鳴を上げる菜緒に、洋介は再び角度を変えて挑み直した。
チロリと舌を出したような肉花びらがぴとっと亀頭にまとわりつくのを巻き添えにし、慎重に淫裂への侵入を図る。
「んっく……んん、あうぅうううっ！」
美臀の中央に、肉棒がめり込んでいく。熱を孕んだ媚肉に、左右に大きく張り出したカリ首が、ぬぷんとあっけなく呑みこまれた。

「くふぅっ、あああぁあんっ！」
背筋をしならせることで、かろうじて身悶えを制御しながら菜緒が啼き叫んだ。
ひとたび亀頭が嵌まってしまえば、返しの利いたエラ首がくびきとなり、容易には抜け落ちない。後は腰全体で押すようにして、ズズズッと肉幹を埋め込んでいくばかりだ。
「……っく……は、挿入(はい)ってくる……はうんっ……洋介がっ、私の中にぃ……」
肉孔が咥えこませた肉幹を、きゅうきゅうと締めつけてくる。相変わらず処女と見紛うほどの締まりのよさだ。
「おっきい……ああ、おちんちんで、お腹の中が広がっちゃいそううぅっ……」
ゆっくりとした挿入は、洋介の脳裏に、肉の蛮刀で膣胴を切り開く映像を思い浮かばせる。押し開かれていく女体には、もっと強い衝撃だろう。
勃起肉を奥へ奥へと受け入れながらも、ふるふると艶臀が震えている。大きな質量に驚いたのか、膣襞がきゅんっと収縮した。
じゅぶじゅぶ、ぐちゅるるっ、ずりゅりゅりゅりゅっ――。
卑猥な水音を立てながら、残りの肉竿を一気に押し進めた。太ももの付け根が、ぷにぷにのお尻に到達すると、くんと捏ねまわして根元まで埋めた。

「ああっ、先輩っ！」
感極まった雄叫びを上げ、洋介はベッドにダイブすると、横たえられた女体をきつく抱きしめた。
豊麗な肉体が、すっぽりと腕の中に収まる。しなやかで柔らかく、それでいて肉感的な抱き心地。ただ腕の中にあるだけで、洋介の官能を根底から揺さぶってくる。
激情がさらに募り、つい腕に力が入った。
「あん！」
愛らしい悲鳴のような喘ぎをあげた唇に、強引に貪りついた。
一瞬、驚いたように目を見開いた綾香も、あえかに唇をひらき洋介の要求に応えてくれる。
（なんて滑らかな唇……。花びらを吸っているみたいだ……）
先日のキスの時より、幾分余裕があるだけ唇の感触を味わうこともできる。
微笑むと胡蝶蘭が咲き誇るような唇は、どこまでもふっくらとやわらかい。
互いの口粘膜が擦れあうと、ピチャピチャと唾液音が、静かな部屋の中に響き渡った。

3.

ピンクベージュのルージュに彩られた唇に、今度は舌を挿し入れて、唇裏の粘膜や歯茎を夢中で舐め啜った。

「あぐっ、ふむぉう、ふぐぅっ」

荒く鼻で息を継ぎながら、彼女の舌を求めて右へ左へと彷徨う。薄い舌が差し出されると、勢い込んでざらついた舌を絡みつけた。

絡まりあった舌が互いの口腔を行き来し、溢れ出した涎が口の端から透明な糸を引いて垂れ落ちていく。

「ああ、こんなに激しいキス、久しぶりだわ……」

同じ家に住んでいても、キスさえもしない夫婦。熟年夫婦であればともかく、結婚していない洋介には、その関係が奇異なものに感じられてならない。

「ふうんっ、うぅっ、ほぉうっ。はぁっ」

吐息のねっとりとした甘さといい、唇のグミのような弾力といい、口腔粘膜の温もりといい、どこもかしこもが洋介を夢中にさせる。中でも綾香の舌腹は、その柔らかさや滑り具合がヴァギナを連想させて、どうにもたまらない気持ちになった。

「先輩の唇ってものすごく官能的で、ああ、もっともっと味わっていたい！」

互いの唇の形が変形し、歪み、擦れあい、ねじれていく。
綿あめを思わせるふわふわ女体をさらに強く抱き締めて、ひたすら唇を奪い続ける。
あまりにも情熱的な目も眩むような口づけ。綾香の中で眠り続けた女の本能を呼び覚まそうと、熱く、熱く、どこまでも熱く唇を貪り続ける。
その努力が通じたのか、いつの間にか綾香は、洋介の太ももにすんなりと伸びた美脚を絡みつけている。股間のあたりがむず痒いのか、さりげなく擦りつけてまでいるのだ。
「ふおん、はあああっ、ふむむむっ」
息継ぎの時間さえ惜しいと思えるくらいに唇を合わせ、舌をもつれさせ続ける。
ストレートロングの黒髪の中に手指を入れ、豊かな雲鬢を愛しい想いと共にかき乱した。ひたすら甘い息苦しさの中に、時間さえ押し流されていく。
どれほど綾香の唾液を啜ったことか。ようやく離れた時には、混じりあった二人の唾液で、彼女のルージュがべっとりとふやけていた。
「先輩……」
「ふぅぅっ。こんなに情熱的にキスをしたの初めてかも……」
そう言うと綾香は、名残を惜しむように洋介の上唇を、上下の唇で挟み込み甘くプ

ルンと引っ張った。
その悪戯っぽい表情は、殺人的なまでに色っぽい。
「先輩、それ本当ですか？」
紅潮した頬が、こくりと頷いた。その後に、何か物言いたげな首をかしげる仕草。洋介も首を斜めにかしげて促した。
「あのね、洋介くん。私のこと先輩って呼ぶのやめて。もう田山でもないのだし、だからと言って洋介くんに神谷で呼ばれたくないし……だから、綾香って……ね？」
秋波を含んだシルキーボイスに、耳元をくすぐられる。
「うん。あ、綾香……さん」
「ダメぇっ……さんもいらないっ！　ね、綾香って、さあもう一度」
かぷっと耳朶を甘噛みされた。
「あ、綾香！　綾香、大好きだよ」
お返しとばかりに、美貌にやさしく唇を当てる。色っぽさの源のような眦のほくろにも口づけすると、綾香が蕩けんばかりの表情で微笑んだ。
「うれしい」
首筋に細い腕がむぎゅっと巻きつく。グレーのチュニックは、袖が肘ほどしかない

ため、腕のすべすべした肌触りが直接首周りを刺激してくる。二の腕さえも、ふんわりと食パンの生地のようにやわらかい。

洋介は、もう一度ちゅちゅっと唇をかすめてから、いよいよその身に着けているものを脱がせにかかった。細身の綾香なのに、ぷにぷにと肉感的な女体の秘密を探るような気持ちもあった。

「綾香、バンザイして。これを脱がせるから」

ベッドに横たえたままの綾香のチュニックを胸元のきわどいところまでまくり上げて、そう促すと、素直にそれに従った両腕が小顔の脇に上げられる。

引き締まったお腹に続き、豊かな膨らみを露出させ、最後に手指を抜き取る。

脇の丸い窪みが、艶めかしくも官能的だった。

「ああん。やっぱりちょっと、恥ずかしい……」

洋介の視線を感じ、ブラジャーだけの姿となった上半身がくねくねとよじられる。その素晴らしいプロポーションに洋介は、言葉もないままに感動していた。

確かに、スレンダーに違いないが、綾香は着やせするタイプらしく、脱ぐと凄いのだ。モデル顔負けにボン、キュッ、ボンと、ど派手にメリハリが利いている。

しかも、その肉体は、女盛りに近づいて薄らと熟脂肪を載せはじめている。熟れが

及んでいるから、どこもかしこもが驚くほどやわらかい。この身体ならば、ぷにぷにと官能的な触り心地も当然だった。それでいて、水分をたっぷりと含んでいるのか、透明感溢れる色白の肌は、しっとりと瑞々しい。

「綺麗だぁ……」

魅惑の上半身に、洋介は、感嘆の声を禁じ得ない。未だ、肝心な部分は隠されたままだと言うのにだ。

モカ色のブラジャーは、華やかな割にどこか控えめな綾香らしく、バスト全体をホールドするタイプ。その深い谷間から、膨らみの豊かさは十分に伝わるものの、その全容までは窺い知れない。

洋介は、匂い立つまでのおんなぶりに、うっとりと見惚れながら次なる行動に移った。

「これも外すよ。おっぱい見せてね」

秘密のベールを暴くように、機能性に優れたノンワイヤーのブラジャーを外しにかかった。

正面から両腕を回し、女体を抱きしめるようにして、背中のフックを外す。

決して手馴れているわけではないが、極上の抱き心地を堪能しながらの作業は、こ

の上なく愉しい。
ぷっつと軽い音を立てて、フックが左右に泣き別れる。
「綾香のおっぱいを僕が見たなんて、あの頃の放送部の仲間たちが知ったら、悔しがるだろうなあ」
「もう、洋介くんったらぁ……」
締めつけを緩めたブラジャーを、ゆっくりと両腕から抜き取った。
まろび出た乳房は、目も眩まんばかりの神々しさ。横たえていてもぎゅんと前に突き出ていて、Dカップ以上はあるだろう。さすがに、まなみほどの巨乳ではないものの、十代の肌と見紛うほどのピチピチしたハリのお蔭で、その重々しさに負けることも、横に流れることもない。ボボンと飛び出すロケットおっぱいなのだ。
乳肌も、他の肌同様に白く、透明感に満ちている。その頂点では、色素の淡い薄紅が、きれいな円を描いている。乳頭は、予想と違い少し大きめ。洋介の人差し指の第一関節分ほどもあるだろう。大人しい印象の綾香とのギャップもあって、より艶めかしく映る。
洋介は、あまりの興奮に声もないまま、ねっとりとした手つきで、その乳房を両手で覆った。

「あん！」
いきなりの狼藉に、シルキーな声質が甘く掠れる。けれど、それっきり綾香は身じろぎするでもなく、ただじっとして身を任せてくれるのだ。
つるんと剥き玉子のような乳房は、まるでワックスが塗ってあるかのごとく、すべすべしているにもかかわらず、しっとりと掌に吸いついてくる。
表面をきゅきゅっと掌で磨けば、ふるるんと艶めかしく揺れる。
洋介は、掌を下乳にあてがい直すと、その容を潰すようにむにゅりと揉みあげた。
「あっ……うっ……ううん……」
プリンのようなやわらかさ、スポンジのような弾力、そしてクッションのような反発力が心地よく手の性感帯を刺激してくれる。
ここで本格的に、乳房を責めたいところだが、何よりもまず彼女の全裸を拝んでおきたい。
洋介は、魅惑の膨らみに後ろ髪を引かれつつ、その身体をずらし、綾香の下腹部へと取りついた。
「あ、今度は、下半身なの？」
ぎゅっと目を瞑っていた綾香が、薄目を開けて次に何をされるのか確かめた。けれ

ど、切れ長の目は、わずかばかりそのくっきりとした二重を見せただけで、またすぐに閉じられてしまう。
長いまつ毛が、小刻みに揺れるのが、彼女の緊張感を物語っていた。
「綾香の太もも、ほっこりとしていてやわらかい……」
オシャレな黒の網タイツ越しの太ももに、うっとりと頬ずりしながら、もう片方の脚もねっとりと撫で回す。
ほっこりした温もりを堪能していると、微かに酸性の臭気が、もわもわっと立ち昇ってくる。
「もしかして、もう濡れているの？」
くんくんと、鼻を蠢かし匂いの源泉を探ると、股間の付け根のあたりであることは疑いようがなかった。
「ああ、だめよ洋介くん。そんなところ嗅がないでぇ」
狼狽する綾香をよそに、ついには鼻先を股間にくっつけて、ふごふごと嗅ぎまわった。
「ああん。そんなあ、女性の匂いを嗅ぐだなんて、洋介くんマナー違反！」
伸びてきた甘手が、やさしく洋介の頬を包み込んだ。まるで悪戯な仔犬を咎めるよ

うな口調に、洋介は思わずニンマリした。
「だって、この匂い。綾香の匂い懐かしいんだ。高校生の頃の淡い想いが蘇ってくる匂いなんだよ」
「うそっ！　私、洋介くんにあそこの匂いなんて嗅がせたことないわ」
「でも、綾香のフェロモン臭は変わらない。甘くて切なくて、ちょっぴり酸味があって……。まあ、さすがにここは、ダイレクトすぎて、大人の匂いが濃いけれど……」
「いやあん。もう、洋介の助平っ！」
身悶えして、しきりに恥じらう綾香。その姿が見たくて、口ではそう言ったものの、実際の匂いはバニラエッセンスに、フルーティな酸性を加えた程度で、汗ばんでいる割に饐えた感じはしない。不快感などまるでなく、洋介の性欲を高めるばかりの匂いなのだ。
「うあああっ、恥ずかしがると、エッチっぽい動物性の酸味が増してきた。なんだか、匂いでおちんちんをくすぐられているみたいだ!!」
再び、洋介はショートパンツの船底に鼻先をぐりぐりと押しつけた。ムチムチほこほこの太ももを撫で回しながら、鼻先を振動させて股間に擦りつける。
「あうううっ……そ、そんなことされたら、匂いが滲み出てきて当たり前よぉ！」

洋介の髪の中に甘手が差し込まれ、しきりに頭皮を刺激される。
「あうん……ああっ、あっ、だめよ、私、敏感になっちゃうぅ……」
「ああ、僕もたまらない。もっと、直接、ここの匂いが嗅ぎたい。綾香のおま○こ、舐め舐めしたい！」
興奮状態の洋介は、ショートパンツの前ボタンを手早く外すと、ファスナーを一気に下げた。細腰にへばりつく網タイツのゴムに手指を掛け、ショートパンツごと剥いていく。
綾香は、わずかに腰を浮かせてショートパンツが通り過ぎるのを待ち、今度は、長い脚を天に突き上げるようにして、網タイツを抜き取りやすいようにしてくれる。
「うわああ、綾香の脚、きれい！」
綺麗以外の形容が見当たらないくらい完全無欠の美脚。滑らかな脚線に、手指を這わせると、大理石のようにツルスベだった。
爪先をきゅっと天井に向けると、子供を孕んだ若鮎のようなふくらはぎが、躍動して引き締まる。
左右に丸く大きく張り出した腰部は、いかにも女性らしく豊かで、悩ましいほどの腰つき。並みの女性の乳房ほどもやわらかいと思われた太ももが、艶光りして直接触

れられるのを待ちわびている。
「すごい。すごい。本当にきれいだ」
人魚姫を髣髴とさせる下半身に、大感動の洋介は全身に震えが来ている。
こうなれば、天女のような下腹部に残された最後の薄布も早く脱がせたい。けれど、洋介は、はやる気持ちを必死で抑えた。
「綾香が今穿いているこのパンティももらえる？　たっぷりとHな匂いが染みついたやつ。いいよね？」
我ながら変態じみていると思わぬでもないが、欲しいものは欲しいのだ。菜緒やまなみには決して頼めないことも、口に出してしまえるのも綾香の魅力だった。
真っ赤にさせたややしもぶくれ気味の頬が、案の定、従順に縦に振られた。
「本当に？　やったあ！」
子供のように歓んで見せてから、またしてもニンマリと微笑む。目をいやらしく三角にさせて、顔を股間の至近距離にまで運んだ。
「せっかくだから、綾香のHな匂い、もっとたっぷり染みつけさせてね」
人差し指を一本、ぴーんと伸ばし、パンティの船底に押しつけると、クレヴァスの位置を探るようにして、ゆっくりとなぞり上げた。

「ひううう……むっんん……」
びくんと、艶腰が跳ね上がった。漏れかけたシルキーボイスを、綾香は人差し指を咥えて抑えている。
小さな鼻翼が、愛らしくふくらんでいる。柳眉が八の字を描き、日本的な美貌が、この上なく扇情的な印象に変わった。
「本当に、Hな匂いがむんむんしてくる。この匂いを全部、パンティに移さなくちゃ」
薄布がWを描くくらいに、縦割れに指先で食い込ませる。なおもしつこくあやしていると、ついには恥裂を透けさせるのではと思えるくらい、モカ色にシミがくっきりと浮かび上がった。
「うわあ、パンティがいっぱいお汁を吸ったよ。ほら、判る？」
濡れシミを指で押すと、じゅじゅわああっと愛液が滲むほど、綾香の股間は濡れ濡れだ。
パンティを押しつけられて、ひしゃげている花びらのあたりを、人差し指と中指でV字をつくり、その爪の先でカカカカっと掻き毟る。敏感な部分であることは承知している。決して、痛みなど与えぬように、繊細なタッチで爪を立てた。
「あふんっ……ふむううぅ、はふうう、はひいん……ぬふう、ふあああっ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

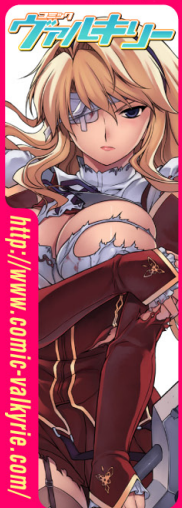
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁でではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!